

公立大学法人金沢美術工芸大学
平成29年度業務実績報告書
訂正一覧表


平成30年7月

□ 項目別実施状況

大学の教育研究等の質の向上に関する目標（教育に関する目標）

(1) 教育内容及び教育の成果等に関する目標

中期目標 ア 学士課程教育にあつては、学部の教育目標及び各科・専攻の教育方針に基づき、教養教育と専門教育を行い、学位授与方針に定める汎用的な教養と専門的な造形力を修めた職業人を育成するとともに、学部を本学の教育拠点と位置づける。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
<p>(ア) 学士課程教育を、本学の教育拠点として位置づけ、学部の教育目標及び各科・専攻の教育方針に基づき、これに相応しい教育を実践する</p> <p>〔質問・意見等〕 大学・学部の目標、教育目標と3つのポリシー等の関連性、3つのポリシー間の整合性等を検証する組織体制についてきちんと書くこと。 （まだ整っていないとしてもそのことを含めて書く。） ※検証する組織体制例 ・大学の取組について3つのポリシーを踏まえた適切性にかかる点検・評価のサイクル（全学レベル、学科レベル、授業レベル）を確立 ・学長を中心とした、学長補佐等からなる全学的なマネジメント体制を構築</p> <p> 【修正対応】 ※次頁</p>	<p>(ア) 大学及び学部の目標、教育目標、3つのポリシー等の関連性について不断に検証する。</p>	<p>○本学は、「芸術が社会に果たす役割を自ら探し行動する人材」（大学憲章）を育成することを社会から負託された使命であると考え、「学位授与方針（ディプロマポリシー）」「教育課程の編成方針（カリキュラムポリシー）」「学生の受入方針（アドミッションポリシー）」を定めている。学士課程においては、教育目標、及び各科・専攻の教育方針に基づく教育を実践するために、3つのポリシーの関連性について教務委員会で協議を重ね、入試委員会では28年度に引き続き一般選抜入試と推薦入試終了後の専攻アンケートを基に検証を行い、入試方法との整合性の確認を行った。</p> <p>○特に29年度には、今後の一貫制博士課程等の大学院改革を見据え、大学全体としてディプロマポリシーを達成するため、カリキュラムポリシーの具体化を教務委員会と大学院運営委員会の双方において協議する中で、学力を保證する視点から単位認定の在り方を検討し、30年度4月入学者より変更することを決定した。具体的には、29年度以前の入学者は単位認定の最低到達点を50点としていたが、30年度入学者より最低到達点を60点とし、併せて、30年度以降の入学者の成績評価は、特に秀でた100点から90点の場合、成績表に「S」の表記をすることとした。</p> <p>○また、ディプロマポリシーに掲げる、「1. 本学における教養教育と専門教育を通して、知的活動はもとより社会生活においても必要となるコミュニケーション能力、論理的思考力、情報リテラシーその他汎用的技能を修得した」という学習成果の達成のため、一般教育科目における外国語科目「英語（四）」で、達成目標とそのための学習プランを受講学生が自ら決めるアクティブラーニングの要素を取り入れた内容とするなど、英語教育の充実に取り組み、更に30年度には、美術科芸術学専攻対象の「専門語学（英語）」やデザイン科対象の「専門英語演習」に加えて、新たに工芸科にも「専門英語演習」を開講することを決定した。</p>	Ⅲ		資料1-1 資料1-2 資料1-3 資料1-4 資料1-5

【修正対応】

○本学は、「芸術が社会に果たす役割を自ら探し行動する人材」(大学憲章)を育成することを社会から負託された使命であると考え、「学位授与方針(ディプロマポリシー)」「教育課程の編成方針(カリキュラムポリシー)」「学生の受入方針(アドミッションポリシー)」を定めている。

「学位授与方針(DP)」の達成のために、全学的な組織である教務委員会で「教育課程の編成方針(CP)」について、同じく全学的な組織である入試委員会で「学生の受入方針(AP)」について協議する体制が構築されており、各委員会において、3つのポリシーの連関性や整合性を全学レベルで検証した。

○また、教務委員会と大学院運営委員会の各委員会において学位授与方針(DP)の達成のための具体策を協議した結果、学力の保証を目的に、単位認定について変更し30年度4月入学者よりこれを適用することを決定し、これを教育研究審議会において承認した。具体的には、29年度以前の入学者は単位認定の最低到達点を50点としていたが、30年度入学者より最低到達点を60点とし、併せて、30年度以降の入学者の成績評価は、特に秀でた100点から90点の場合、成績表に「S」の表記をすることとした。これを受けて各科や専攻等の会議において、30年度から行う「S」評価を含む成績評価のあり方について議論し、適切な運用を図ることを確認した。

○さらに、教務委員会において「学位授与方針(DP)」に掲げる、「コミュニケーション能力を修得した」という学修成果を達成するため、英語教育の充実に資するカリキュラム編成に取り組むことが決定され、これを受けて、英語担当教員が一般教育科目における外国語科目「英語(四)」について、達成目標とそのため学習プランを受講学生が自ら決める「アクティブラーニング」の要素を取り入れた内容に変更した。また、英語担当教員と工芸科教員の協議により、美術科芸術学専攻対象の「専門語学(英語)」やデザイン科対象の「専門英語演習」に加えて、30年度より、工芸科にも「専門英語演習」を開講することを決定した。

○今後も、学長のガバナンスのもとで、教育研究審議会を中心とする全学的なマネジメント体制を強化し、大学及び学部
の目標、教育目標、3つのポリシー等の連関性についての検証を継続していくことを確認した。

□ 項目別実施状況

大学の教育研究等の質の向上に関する目標（教育に関する目標）

(1) 教育内容及び教育の成果等に関する目標

中期目標

ア 学士課程教育にあつては、学部の教育目標及び各科・専攻の教育方針に基づき、教養教育と専門教育を行い、学位授与方針に定める汎用的な教養と専門的な造形力を修めた職業人を育成するとともに、学部を本学の教育拠点と位置づける。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(ウ) 専攻科目においては、各分野に要求される基礎的な造形力の向上、充実を図る。	(カ) 金沢近隣の地元作家を招聘して講演会や実技指導を行い、また近隣の工房見学・体験等を実施する。	○美術科日本画専攻では裏千家大島宗翠氏による茶道の授業を通して日本文化の理解を図った。美術科彫刻専攻では加賀市山中の木彫家宮本志野氏の実技指導を受けた。工芸科では陶磁の武腰潤氏（九谷焼絵付け技法）、漆・木工の山岸一男氏（沈金技法）、金工の宮崎匠氏（惣型技法）をはじめ、金沢近隣の10名を超える作家を招聘し実技指導を受けた。大学院美術工芸研究科デザイン専攻ファッションデザインコースでは小松市の（株）山本絹織（生地メーカー）に赴き、レクチャーを受け多くの生地サンプルについて学んだ。参加学生は一流の技術や基礎技法の大切さを学ぶとともに体験を通して視野を広げる事が出来た。	Ⅲ		資料5

6

〔質問・意見等〕

中期計画が「専攻科目においては、各分野に…」となっているので、デザイン科の実施状況(ない場合も含む)について、業務実績を記載してほしい。



【修正対応】

○美術科日本画専攻では裏千家大島宗翠氏による茶道の授業を通して日本文化の理解を図った。美術科彫刻専攻では加賀市山中の木彫家宮本志野氏の実技指導を受けた。デザイン科では、実技指導を中心に国枝千晶氏によるシルクスクリーン演習、稲垣陽平氏による製品計画論、村上彰彦氏による屋内計画論を実施するなど多種多様な時代のニーズに合った指導を積極的に取り入れた。工芸科では陶磁の武腰潤氏（九谷焼絵付け技法）、漆・木工の山岸一男氏（沈金技法）、金工の宮崎匠氏（惣型技法）をはじめ、金沢近隣の10名を超える作家を招聘し実技指導を受けた。大学院美術工芸研究科デザイン専攻ファッションデザインコースでは小松市の（株）山本絹織（生地メーカー）に赴き、レクチャーを受け多くの生地サンプルについて学んだ。参加学生は一流の技術や基礎技法の大切さを学ぶとともに体験を通して視野を広げる事が出来た。

□ 項目別実施状況

大学の教育研究等の質の向上に関する目標（教育に関する目標）

(1) 教育内容及び教育の成果等に関する目標

中期目標

イ 大学院教育にあつては、造形芸術に関する高度な理論、技術及び応用を研究教授し、芸術の多様な領域で横断的に活躍できる高度専門職業人を育成するとともに、大学院を本学の研究拠点と位置づける。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
<p>(イ) 研究拠点としての大学院に相応しい、実技、理論における多様で横断的な教育研究の場を設け、学習需要に対応する教育研究の展開と連関を図る。</p>	<p>(イ) 金沢21世紀美術館へ大学院生をインターンとして送り出し、実践的な教育の機会とする。</p>	<p>○28年度の2名と比較し、29年度は、5名の大学院生をインターンとして金沢21世紀美術館に送り出した。研修内容は、油画修士1年生と芸術学修士1年生の2名が、展覧会ローカルテキスタイル「To&Fro」のアシスタントとして研修した。同じく、芸術学修士1年生が、コレクション展3「見る」ことの冒険展のアシスタントとして研修した。更に、工芸修士1年生が、展覧会「自治区」のアシスタントとして、同じく工芸修士1年生が、コミッションワークのメンテナンス及び展示収蔵作品の環境保全について研修した。 ○また、金沢市内小学4年生児童招待プログラムである「ミュージアム・クルーズ」に、工芸修士1年生、油画修士1年生、芸術学1年生の3名が、アシスタントとして参加し、実践的な教育の機会とした。</p>	IV		資料19

【質問・意見等】

28年度の経験者による報告会についての記述を足すとともに報告会の内容や参加者の分かる資料も添付すること。

【修正対応】

○28年度の2名と比較し、29年度は、5名（1学年37名の内）の大学院生をインターンとして金沢21世紀美術館に送り出した。研修内容は、油画修士1年生と芸術学修士1年生の2名が、展覧会ローカルテキスタイル「To&Fro」のアシスタントとして研修した。同じく、芸術学修士1年生が、コレクション展3「見る」ことの冒険展のアシスタントとして研修した。更に、工芸修士1年生が、展覧会「自治区」のアシスタントとして、同じく工芸修士1年生が、コミッションワークのメンテナンス及び展示収蔵作品の環境保全について研修した。このように29年度のインターン生5名を送り出すことが出来たのは、28年度の経験者による実施報告会を29年3月2日に本学内で開催し、インターン生となった実技系の学生はこの経験を今後の作家活動に活かす抱負を述べ、また理論系の学生は将来学芸員となることを目指す上での心構えについて語り、29年度の参加に向けた理解と意欲の向上に努めた成果である（参加者15名）。なお、インターン生の中には台湾からの留学生も参加した。（資料なし）

○また、金沢市内小学4年生児童招待プログラムである「ミュージアム・クルーズ」に、工芸修士1年生、油画修士1年生、芸術学1年生の3名が、新たにアシスタントとして参加し、実践的な教育の機会とした。（資料19-2追加）

16

□ 項目別実施状況

大学の教育研究等の質の向上に関する目標（教育に関する目標）

(1) 教育内容及び教育の成果等に関する目標

中期目標

ウ 定められた学位授与基準、学位審査基準、成績評価基準を厳正に適用し、また不断に検証することによって、芸術系大学に相応しい教育の成果の測定指標を作成し、教育の質を保証する。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(ア) 成績評価システムの総合的な検証を行い、公平性、透明性、厳格性が担保された成績評価を行うとともに、その検証システムを実質的に機能させる。	(ア) 引き続き、教務委員会を中心に、シラバスの研究と見直しに努める。	○29年度第5回教務委員会において、他の国公立芸術系大学や地元国立大学の成績評価基準とそのシラバス表記の状況を研究し、大学院運営委員会と連携をとりながら「成績評価欄」の評価基準（A～C）の適合性を検証した。この結果、学力保障の観点から30年度以降入学生から単位認定の最低到達点を50点から60点に変更した。 ○加えて、認定基準の変更に伴い、学修成果を適正に反映させるため評価を、従来のA、B、C表記からS、A、B、Cの4段階に改め、30年度シラバスに新たに明記することとした。	Ⅲ Ⅳ		資料1-5

21

〔質問・意見等〕

説明された実施状況は年度計画の範囲であると思われる(Ⅲではないか)。

- ・より実質的に、「シラバス記載の充実」、「15回又は30回の授業概要の明確な表記」等がなされる等、各シラバスの内容がすべて、一定のレベルを保っており、ばらつきがない
 - ・シラバス内容のチェックと改善を求める組織的体制・取組が企画されている
- といった点の改善があれば、Ⅳの評価に値すると考える。

【修正対応】

文面変更なし。自己評価Ⅲに変更。

大学の教育研究等の質の向上に関する目標（教育に関する目標）

(3) 学生への支援に関する目標

中期目標 ア 学習支援体制を検証し、学部教育と大学院教育のそれぞれに相応しい学習支援体制を構築する。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(ア) 授業科目の履修に関する総合的な相談・支援体制を検証し、さらなる活用を進める。	(イ) 大学生生活全般に関する相談指導に学生相談室で積極的に応じる。	<p>○29年度入学生から、入学手続き時に、入学後の相談体制、障害学生への特別な配慮についての可能性を通知する資料を同封した。また、入学者に対してアンケートを実施し、入学後の授業等での支援ができるようにした。</p> <p>○学生支援委員会と教務委員会との合同委員会の話し合いから、教員が学生を支援するために学生相談室を利用しやすくするためのマニュアルを作ることを検討し、教職員向けのリーフレットを新たに作成した。</p> <p>○学生相談室への来談者の話を丁寧に聞き、学生の相談内容を必要に応じて教職員に伝えたことで、学生が教職員から履修上の協力を得やすくなった。</p>	IV		資料37 資料38 資料39

【質問・意見等】

- ・新たなリーフレットがどのように活用されたかを記述すること
- ・相談内容の扱いについての記述を修正（「個人情報に留意しながら」といった文言を加える）すること



【修正対応】

○29年度入学生から、入学手続き時に、入学後の相談体制、障害学生への特別な配慮についての可能性を通知する資料を同封した。また、入学者に対してアンケートを実施し、入学後の授業等での支援ができるようにした。

○学生支援委員会と教務委員会との合同委員会の話し合いから、教員が学生を支援するために学生相談室を利用しやすくするためのマニュアルを作ることを検討し、教職員向けのリーフレットを新たに作成した。これを用いて全教員が学生相談室をより有効に活用すると共に、学生に対し統一的な観点から適切な指導を実施することができた。

○学生相談室への来談者の話を丁寧に聞き、個人情報の保護にも注意しながら、学生の相談内容を必要に応じて教職員に伝えたことで、学生が教職員から履修上の協力を得やすくなった。

大学の教育研究等の質の向上に関する目標（教育に関する目標）
 (3) 学生への支援に関する目標

中期目標 ア 学習支援体制を検証し、学部教育と大学院教育のそれぞれに相応しい学習支援体制を構築する。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(イ) 授業科目以外の課外、学外の活動に関する支援体制を検証し、充実を図る。	(オ) 個展、グループ展等の自主的な学外発表活動を支援・奨励する。	○学生の個展・グループ展の開催については、57件に学生展等開催交付金を交付した。また、公募展出品については、42件に公募展出品等事業補助金を交付することで学生の自主的な学外発表活動に対する支援を行った。 ○特に、有志の学生および教員らで結成し、大学として奥能登国際芸術祭に参加したプロジェクトチーム「スズプロ」の活動は、芸術祭期間中の作品観覧来場者数が全体の2番目の集客数となり、美大が持つ美術の力をおおいにアピールすることができた。	IV		資料27 資料33

39

〔質問・意見等〕

「～学習支援体制を構築する。」という中期目標を達成するための「支援・奨励」の中身をより詳細に記述すること（「○特に～」の前段に追加すること）



【修正対応】

○学生の個展・グループ展の開催については、57件に学生展等開催交付金を交付した。また、公募展出品については、42件に公募展出品等事業補助金を交付することで学生の自主的な学外発表活動に対する支援を行った。
 ○特に、有志の学生および教員らで結成し、大学として奥能登国際芸術祭に参加したプロジェクトチーム「スズプロ」の活動に対しては、別途予算を計上すると共に、完成した作品の紹介に加え、構想から準備、制作活動に至るまでのドキュメンタリー番組を制作し、地元のテレビ放送局を通してPRするなど、金銭面はもとより、それにとどまらない大学を挙げての後方支援を行った。この結果「スズプロ」は芸術祭期間中の作品観覧来場者数が全体の2番目となり、美大が持つ美術の力をおおいにアピールすることができた。

大学の教育研究等の質の向上に関する目標（教育に関する目標）

(3) 学生への支援に関する目標

中期目標 イ メンタルヘルスを含む健康管理支援体制及び生活支援体制を継続的に検証し、充実させる。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(ウ) 大学独自の奨学金制度や学生顕彰制度を充実させ、効果的な学生支援を推進する。	(カ) 大学独自の褒賞制度の充実を図る。	<p>○「KANABIクリエイティブ賞」として、公募展・コンクールで優れた評価を得た学生、創造的でめざましい活躍をした学生やグループ、卒業・修了制作展での優秀者を、「けやき賞」として、学部1～3年生の独創的な活動を、卒業式終了後に表彰した。受賞者選考にあたっては、教授会での周知、学内各専攻掲示板を活用し、全学的な情報発信を実施した。</p> <p>○加えて、28年度まで、学内のエントランスホールにおいて行っていた「KANABIクリエイティブ賞」および「けやき賞」の受賞式を、29年度より、収容人員の多い美大ホールに変更した。これにより、保護者にも学生が表彰される姿をステージ上で晴れやかに見せることで、褒賞制度の付加価値を高めることが実施できた。</p>	Ⅲ Ⅳ		資料30

46

〔質問・意見等〕

「に」を加える。(学内のエントランスホール「に」において)



【修正対応】

○「KANABIクリエイティブ賞」として、公募展・コンクールで優れた評価を得た学生、創造的でめざましい活躍をした学生やグループ、卒業・修了制作展での優秀者を、「けやき賞」として、学部1～3年生の独創的な活動を、卒業式終了後に表彰した。受賞者選考にあたっては、教授会での周知、学内各専攻掲示板を活用し、全学的な情報発信を実施した。

○加えて、28年度まで、学内のエントランスホールにおいて行っていた「KANABIクリエイティブ賞」および「けやき賞」の受賞式を、29年度より、収容人員の多い美大ホールに変更した。これにより、保護者にも学生が表彰される姿をステージ上で晴れやかに見せることで、褒賞制度の付加価値を高めることが実施できた。

大学の教育研究等の質の向上に関する目標（研究に関する目標）
 (2) 研究実施体制等に関する目標

中期目標 イ 研究の質を向上させるため、研究の方法や内容・成果に対する評価体制について不断に見直す。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(7) 研究方法、内容、成果に対する点検・評価方法を検討し、評価の結果を研究方法等の改善に役立てる仕組みを構築する。	(7) 大学における研究活動を新たに開発し、また研究成果に対する点検・評価方法の整備に取り組む。	<p>○大学における研究活動の新たな取り組みとして、29年度に開催された奥能登国際芸術祭に本学教員及び学生が参加した。大学として、芸術祭に参加したプロジェクトチーム「スズプロ」の活動は、芸術祭期間中の作品観覧来場者数が全体の2番目の集客数となり、美大の持つ美術の力をおおいにアピールすることができたことで、美大に対する高い評価を得た。</p> <p>○その結果をふまえ、引き続きスズプロの作品である「奥能登曼荼羅」について、主催者である珠洲市が保存していくことを決定しており、学内で協議した結果、保存・活用に協力することとした。</p> <p>○また、研究成果に対する点検・評価方法の整備としては、教員が教育研究、社会貢献、大学運営の項目の目標を設定し、教員自身による一次評価と学長による二次評価を行う教員評価制度を引き続き実施したが、加えて必要な際には、学長と教員が個別に協議を行う場を新たに設けたことで、多様な活動の推進に向けた研究環境の改善に努めた。</p>	Ⅲ		資料27

77

〔質問・意見等〕

(1つ目と2つ目の○をまとめた上で)1つめの○が「研究活動の新たな開発」の実績であり、2つ目「研究成果に対する点検・評価方法の整備」の実績であることを明記して記述すること



【修正対応】 ※次頁

【修正回答】

○大学における研究活動の新たな開発：29年度に開催された奥能登国際芸術祭に本学教員及び学生が参加した。大学として芸術祭に参加したプロジェクトチーム「スズプロ」の活動は、芸術祭期間中の作品観覧来場者数が全体の2番目の集客数となり、美大の持つ美術の力をおおいにアピールすることができたことで、美大に対する高い評価を得た。その結果をふまえ、引き続きスズプロの作品である「奥能登曼荼羅」について、主催者である珠洲市が保存していくことを決定しており、学内で協議した結果、保存・活用に協力することとした。

○研究成果に対する点検・評価方法の整備：教員が教育研究、社会貢献、大学運営の項目の目標を設定し、教員自身による一次評価と学長による二次評価を行う教員評価制度を引き続き実施したが、加えて必要な際には、学長と教員が個別に協議を行う場を新たに設けたことで、多様な活動の推進に向けた研究環境の改善に努めた。また、教員研究費審査会を4月20日に開催し、各教員から申請のあった研究内容について、教育研究審議会メンバーや事務局関係者、研究所担当者が、過去の研究活動に対する取り組みや成果を評価した上で、当該年度に記載してある金額や内容を精査し、研究活動に要する経費の採択や金額の配分を決定する仕組みとなっている。

業務運営の改善及び効率化に関する目標

1 組織運営の改善に関する目標

(2) 教育研究組織の見直しに関する目標

中期目標

特色ある教育研究を推進するとともに、学習に対する学生の需要や研究に対する社会の要請を検討し、教育研究組織について計画的な見直しを行う。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
<p>(7) 学部及び大学院について、科・専攻の編制、学生定数、教員定数等について不断の検証を行い、改善に努める。</p> <p>〔質問・意見等〕 2つ目の○の冒頭に「今年度は実施できなかったが」という記述を加えた上で、将来の大学院定員の増員の準備として、研究生制度を作ったことが分かるように記述すること</p>	<p>(イ) 大学院の学生定員の増員、及び大学院再編に関する検討を行い、これを実施する。</p>	<p>○大学院改革の方向性を踏まえ、30年3月の教育研究審議会において、30年度の計画を決定した。これにより、学習に対する学生の需要や研究に対する社会の要請を検討し、教育研究組織について、計画的な見直しを行うとともに、新キャンパスへの移転を見据えて、大学院の学生定員の増員、及び大学院再編に関する計画の策定に着手することとした。【再掲98】</p> <p>○この計画に連関して大学院内に新たに研究生制度をつくり、29年度中に募集も開始したことで、30年4月より、研究生7名を本学に受け入れることを決定した。</p> <p>○加えて、教育研究活動の質の保証・向上のために、新キャンパスへの移転と大学院改革を視野に入れた大学院専任教員制度の見直しを行うこととした。</p>	III		資料18

99

【修正回答】

○大学院改革の方向性を踏まえ、30年3月の教育研究審議会において、30年度の計画を決定した。これにより、学習に対する学生の需要や研究に対する社会の要請を検討し、教育研究組織について、計画的な見直しを行うとともに、新キャンパスへの移転を見据えて、大学院の学生定員の増員、及び大学院再編に関する計画の策定に着手することとした。【再掲98】

○29年度に大学院の学生定員の増員は実施できなかったが、この計画に連関し、将来の大学院定員の増員の準備として、大学院内に新たに研究生制度をつくり、29年度中に募集も開始したことで、30年4月より、研究生7名を本学に受け入れることを決定した。

○加えて、教育研究活動の質の保証・向上のために、新キャンパスへの移転と大学院改革を視野に入れた大学院専任教員制度の見直しを行うこととした。

業務運営の改善及び効率化に関する目標

1 組織運営の改善に関する目標

(3) 人事制度の改善に関する目標

中期目標

ア 大学の特性に即した柔軟で弾力的な人事制度を運用することによって、大学運営や研究教育を効果的かつ効率的に推進する。また、教職員の研修制度の充実を図る。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(イ) 教育研究活動の質の向上のために、多様で柔軟な教員人事制度を検討する。	(ケ) 学芸員等の専門知識を有する職員を他大学等へ講師として派遣し、交流を図る。	○常勤学芸員を金沢学院大学へ非常勤講師として派遣し、科研費の研究分担者として他大学の研究者とともに研究活動に従事することで、学外専門家との交流を図った。 ○非常勤学芸員を12月9日に山梨県立美術館で開催された、特別企画展「狩野芳崖と四天王」記念シンポジウム「なぜ今、狩野四天王を評価するのか」に派遣し、本学所蔵作品に関わり近世・近代絵画の専門家との情報交換と交流を深めた。	Ⅲ		資料69-2

108

〔質問・意見等〕

非常勤講師の委嘱に関する法人組織の立場や考え方について記述すること。



事務局修正【修正回答】

○金沢学院大学の求めに応じ、本学の常勤学芸員を非常勤講師として派遣し、学外専門家との交流を図った。常勤学芸員が「博物館学」教育の実績を積み、他大学の研究者と交流することは、現在、美術工芸研究所ギャラリーの博物館相当施設認定を目指している本学にとっても、大変有意義であり、大学としても、常勤学芸員が非常勤講師に就くことを奨励している。

○常勤学芸員が、科研費基盤研究B「東日本大震災で被災した民族文化財の保存及び活用に関する基礎研究」(国立民族学博物館)の研究協力者の一員として研究や展覧会企画に従事することで、学外専門家との交流を図った。

○非常勤学芸員を12月9日に山梨県立美術館で開催された、特別企画展「狩野芳崖と四天王」記念シンポジウム「なぜ今、狩野四天王を評価するのか」に派遣し、本学所蔵作品に関わり近世・近代絵画の専門家との情報交換と交流を深めた。

財務内容の改善に関する目標

1 外部研究資金、寄附金その他の自己収入の増加に関する目標

中期目標

科学研究費補助金などの競争的研究資金、社会連携等による共同研究及び受託研究などの外部資金、寄附金等の獲得に積極的に取り組む。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(ウ) 大学の特性を活かした独自の自己収入増加策を検討し、企業等からの資金の導入に取り組む。	(エ) 社会連携事業による外部資金の獲得に努める。	○企業や地方公共団体からの依頼について、社会連携運営会議において内容と教育的な効果を確認し、産学連携事業を16件、地域連携事業を14件受託し、25,216千円の受託研究収入を計上するなど、当初見込の16,000千円を大幅に上回る収入を得た。	IV		資料7

117

〔質問意見等〕

金額だけでなく、資金獲得の努力についての質的な充実について記述すること



【修正回答】

○企業や地方公共団体からの依頼について、社会連携センター会議において内容と教育的な効果を確認し、産学連携事業を16件、地域連携事業を14件受託し、25,216千円の受託研究収入を計上するなど、当初見込の16,000千円を大幅に上回る収入を得た。これまでの社会連携事業を通して連携を深めてきた企業への働きかけを継続する一方、新規の問合せ企業に対しては実績をまとめた報告書を用いてPRなどを行い外部資金の獲得に努めた。また、受託内容については、ユニバーサルデザインを使った観光案内ツールの開発やIoT技術を使った商品開発、発展していく医療現場に寄り添う歩行車のデザインなど次世代型や福祉分野の依頼が増え、美大ならではの機能性を重視した新しいデザインの提言を行った。

自己点検・評価及び情報の提供に関する目標
2 情報公開や情報発信等の推進に関する目標

中期目標

社会に対する説明責任を果たすため、積極的な情報公開を図る。また、大学の活動を広く社会に示すため、教育研究活動や大学の特色について、積極的な情報発信を行う。

中期計画	年度計画	業務実績（計画の進捗状況）	自己評価	自己評価と異なる評価委員会の評価とその理由	添付資料番号
(7) 広報実施体制と広報戦略を見直し、広報活動を強化する。	(7) 28年度の広報実施体制と広報戦略の見直しを踏まえ、引き続き、広報活動を強化する。	<p>○28年度に広報戦略を協議して、29年度はその計画に従い進学相談会、高校や予備校への訪問、新聞広告などへの掲載、またホームページについても改定（卒業生作品集リニューアル、教員紹介ページ）を進め大学としての戦略を打ち出した。</p> <p>○特にオープンキャンパスでは、受験生からの要望を受けて在學生を前面に立てる計画を立案して実行した。さらに、学内の案内サインを含む環境整備にも取り組むことでこれまでの開催で最大の1,820人の参加者があった。</p>	IV		資料73

【質問・意見等】
運営を学生主体にしたという改革を実施したことを分かりやすく記述すること



【修正回答】

○28年度に広報戦略を協議して、29年度はその計画に従い進学相談会、高校や予備校への訪問、新聞広告などへの掲載、またホームページについても改定（卒業生作品集リニューアル、教員紹介ページ）を進め大学としての戦略を打ち出した。

○特にオープンキャンパスでは、これまでは各専攻間において個別に開催内容の見直しを行っていたが、受験生からの要望を受けて在學生を前面に立てる計画を立案して、運営そのものを学生主体に変更するという大規模な改革をした。さらに、学内の案内サインを含む環境整備にも取り組むことでこれまでの開催で最大の1,820人の参加者があった。

131